師範學校

國文教科書

本科用

修正十六版

卷四

375.9
Y619
資料室

42571
教科書文庫
4
810
51-1916
20003
02270

文部省檢定濟
師範學校國語科教科書
大正五年一月十二日

師範學校國文教科書

吉田彌平編

本科用

東京　光風館藏版

卷四

資料室
375.9
Y019

廣島大學圖書之印

広島大学 教 26515 図書

師範學校 **國文教科書** 本科用卷四

目次

一 俚諺論……大西祝 一頁
二 大事小事（口語文）……嘉納治五郎 九
三 きぬた（分別書方）……しみづはまおみ 一九
四 秋の水（俳句）……二〇
五 千里が竹その一……近松門左衛門 二一
六 千里が竹その二……近松門左衛門 二九
七 月の洞庭湖（口語文）……佐々木信綱 三五

八 相模灘の落日……德富蘆花 四一
九 光頼卿の參內……四五
一〇 常磐木(新體詩)……島崎藤村 五七
一一 佐那田餘一その一……六三
一二 佐那田餘一その二……六九
一三 文學と氣品(口語文)……芳賀矢一 七八
一四 南清の風景……內藤湖南 八六
一五 つくば山(短歌)……九二
一六 もろ矢……兼好法師 九三
一七 扇の的……九五

一八 寺門政次郎に答ふ(候文)……藤田東湖 一〇三
一九 福澤先生を悼むその一……島田三郎 一一三
二〇 福澤先生を悼むその二……島田三郎 一二一

師範學校 國文教科書 本科用 卷四目次 終

師範學校圖書之印

師範學校 國文教科書 本科用 卷四

大西祝

一 俚諺論

羅馬の一*詩人がエピグラムを蜜蜂に譬へて「螫あり、蜜あり、軀は小さし」といへるは、すべての俚諺にとはいひ難きも、其の最も妙なるものには恰當なる語なるべし。俚諺の上乘なるものは多くは此の三者を具ふ。言短くして意義味ふべく、寸鐵人を刺すの妙あり。

*詩人の名は今傳はらず。

人口に膾炙し易からんことを求むるがゆゑに、俚諺はおのづから律語を爲す傾あり。我が國語にては五七又は七五が其の自らなる律呂なれば、我が國の俚諺には此の律に從へるもの甚だ多し。「雉子も鳴かずばうたれまい。」・「心の鬼が身を責める。」といふ如く、最もよく人口に膾炙せるものにして七五の調子をなせるはいと多し。「人と屏風はすぐには立たぬ。」・「思ふ念力岩でも通す。」・「身を捨てゝこそ浮む瀬もあれ。」などは七々の調子をなして語拍子よし。「十で神童、十五で才子、二十過ぎてはたゞの人。」といふも、其の

語に一種の律あるなり。

右と同じき理由により、同語または同韻を重ねたる類のもの多し。例へば「多勢に無勢。」・「短氣は損氣。」・「弱り目に祟り目。」・「處かはれば品かはる。」・「藥九層倍。」・「勝つて兜の緒をしめよ。」といふがごとし。

かく律を成し、尾韻又は頭音をあはすに於ては、既に詩の句法に似たる所あるのみならず、俚諺に抽象の語少く、多くは具象的に言做して感動の强からんことを求め、又これが爲に屢誇張の言を用ふるなども、それが詩歌に似たる點なり。此の故に、諺にて物の

度量をいふには其の數又は量を定めていふを好む。「七たびさがして人を疑へ。」・「人の噂も七十五日。」・「預り物は半分の主。」などの類は數ふるに遑あらず。數の中にても最も好んで用ふるは三の數なるべし。「三度目が定の目。」・「三年たてば三つになる。」・「懺悔話をすれば、三年の罪が滅びる。」・「三人よれば文殊の智慧。」・「三人よれば人中。」・「朝起は三文の徳。」其の他多くあるべし。「用心は臆病にせよ。」・「黑犬にくはれて灰汁のたれ滓に恐れる。」などは、誇張していふによりて其の意味を成せるもの、例なるべし。

誇張を喜ぶと同じき理由を以て、俚諺は一見實しやかならぬ言句卽ちパラドックスを用ふるを喜ぶ。此の種の諺に深く味ふべきもの少からず。「急がば廻れ。」・「言はぬは言ふに勝る。」・「逢ふは別れの始め。」・「兄弟は他人の始り。」・「論語讀の論語知らず。」・「人を使ふは使はれる。」など、其の例なるべし。かく相反するが如き事柄の中に卻つて相通ずる所あるを發見するは、深邃なる智慧の一特徵なり。

パラドックスとにはあらずとも總じて反對のものを竝ぶるは、吾人の注意を捕ふる一方便なり。「骨折

損の草臥儲け。」・「聞いて極樂、見て地獄。」・「問ふは一旦の恥、問はぬは一生の恥。」・「長者の萬燈より貧女の一燈。」などは其の例なり。

反對を置くのみならず、總じて二種の事柄を相竝べてそを比較するは俚諺の一大特色なり。是、俚諺の比喩に富める所以にして、其の比喩の極めて妙なる、詩人の作としてもはづかしからぬものあり。俚諺の最も巧妙なるものは多く此の類にあり。今思ひ出づるに從うて其の三四の例を掲げん。「馬には乘りて見よ、人には添うて見よ。」・「旅は道づれ、世はなさけ。」といふ如きは、幾たび唱するも其の趣味の津々たるを覺ゆ。「花は櫻木、人は武士。」是、我が國民の以てそが理想を誇るに足るものゝ一なるべし。「佛法と臺屋の雨は出でて聞け。」風流の心に富める國民ならで、誰かこれをえ言出でん。これを口ずさみ見よ。如何に詩心・道心・宗教心の相結びてなせる高雅幽玄なる妙趣の浮び來るぞ。

かく二つの事を竝べ出でて比較せるものよりも、唯譬喩を掲げて其の意味を匂はせたるものは其の數遙かに多かるべし。「蟹は甲に似せて穴を掘る。」・「目

くそ鼻くそを嗤ふ。」といふ如きは此の例なり。又巧に隱喩を用ひたるも多し。例へば「商賣（アキナヒ）は牛のよだれ。」・「得手に帆をあげる。」といふが如し。

かく譬喩の用ひやうは種々あれど、其のこれを用ふるは、寓言に於ける用ひかたとは同じからず。「目くそ、鼻くそを嗤ふ。」といふ如きは多少寓言に近よれる所あるが如く思はるれど、俚諺と寓言とは、後者は敍事の體裁を具へ、前者は然らざる點に於て全く相異なり。同じく意を寓して譬喩を用ふるも、寓言はこれを出來事又は動作として語り、俚諺は時間に結ばして唯常恆の事實として語るなり。（大西博士全集）

二　大事小事

嘉納治五郎

「塵積つて山となる。」といふ諺は、小は大の基であるから、小事を輕忽にしてはならぬことを戒めたのである。「爪で拾つて箕でこぼす。」といふのは、小事に齷齪として大事を閑卻する者の弊を戒めたのである。「細行を矜まざれば終に大德を累す。」といふのは小事を愼んで行はなければ大事の累を爲すことをいつたのである。「小利を見ることなかれ。小利を見れ

ば大事ならず。」といふのは、小利の末を逐ふことが卻つて大事の妨となることをいつたのである。「眞に大志ある者はよく小物を勤む。」といつて居る者もあれば、「其の小を養ふ者は小人となり、大を養ふ者は、大人となる。」と教へて居るものもある。

世には斯くの如く大事と小事とに就いて種々の教訓が行はれて居るが、此等を綜合して見ると甚だ相矛盾するやうに見えるものもある、矛盾するやうに見えて其の實兩立するものもある。精細に研究して行くと隨分錯雜になつて其の解決に惑ふやうなこともあるのである。

大事小事といつても、果して如何なる事を小といひ、如何なる事を大といふのであるか。まづ大小の意義を明白にしなければ、此の問題は解決が出來ぬ。

二宮尊德が「それ大は小の積んで成るなり。例へば百萬石の米といへども粒の大なるにあらず。萬町の田を耕すも其の業は一鍬づつの功にあり。」といつて居るのは、其の質は同じであることを、量の上から大小の區別を立てゝ居るのである。孟子が「飲食の人は人これを賤しむ。其の小を養うて大を失ふが

爲なり。」といつて居るのは、其の事の質の上から大小の種類を分けて居るのである。又事柄其のものは小であるけれども、時と場合とに依つて他に重大なる影響を及すこともある。一片の煙草の吸殼が火鉢の中で煙を立てゝ居るのは、吾人に不快を與へても一大事といふほどのことはない。しかし同じ煙草の吸殼が人知れず紙屑籠の中に落ちて、籠を燒き、家を燒き、市街を燒き、幾多の生命財産を損傷するやうになつては、一小事から一大事が生じたと謂はねばならぬ。

又世間では、其の實大事でないことを大事と心得、小事でないことを小事と心得、大小輕重を顚倒して居るやうな事もあるのである。此のやうに大小の意義に差別があるだけ之に關する教訓も變つて來る。隨つて小事をさへ勤むれば大事は自ら成るといふことも出來ないし、大事にさへ心がければ小事は顧みないでよいといふことも出來ない。

然らば事物の大小を正しく判斷する標準は何であるかといふと、理論からいへば理想が標準となるのであるけれども、實際に於ては常識が本位となつて

判斷が下されるのである。吾人の經驗からして、如何なる事が人生に重大なる影響を及すか、如何なる事がさほどに重大でないかを判斷する所の常識といふものが生ずる。吾人は此の常識に依つて物事を判斷する。それが、事の大小輕重を分つ實際的方法である。運動會に於て一場の勝敗を爭ふ爲に其の準備に熱中して、平素の學業を廢する事、身體の防護や活動の自由等を度外視して衣服の體裁・色合・模樣等に意を凝す事、一字一句の穿鑿に拘泥して、文章全體の要領を理解することを務めない事、朋友と散

歩の約束を果す爲に、親の大切な用事が急に起つたのも棄てゝ顧みない事、此等の所爲が事の大小輕重の取捨を誤つて居るのは、一般學生の常識を以てしても容易に判斷し得る所である。

併し常識の判斷が常に必ず完全であるといふことは出來ない。實際は現在の常識に依る外に道はないのであるけれども、一方には益〻經驗を利用し、思慮を重ね、又他人の經驗と意見とに鑑みて、常識の益〻穩健圓滿に發達することを務めねばならぬ。殊に青年は其の經驗少く、思慮も熟さないで、其の常識が未

だ十分に發達して居ない所から、時に偏狹に失する恐がある。重大な事を瑣事と心得て放過し、一小事を大切と心得て熱中するやうなことも、或は無いとは限らぬ。故に青年たるものは常識の十分に發達した先進の忠言に聽き、指導に俟つことが多いと心得ねばならぬ。かくして事物の大小輕重、時機の緩急前後に取捨選擇を誤らず、自己の精力を成るべく重要な方面に用ひ、次第に之を累積して行けば、他日必ず大なる發展を爲し得るのである。

此に注意すべきは、大事を重んずるが爲に小事を等

閑に付したり、不必要と考へたりしてよいといふ理由がないことである。吾人の身體には自ら大小輕重の部分があるけれども、何れの部分にも衞生上の注意を加へることが必要なやうに、小事と雖も忽にすべからざることがある、又小事と思ふことが案外大事になつて來ることがある。故に小事と雖も力の及ぶ限り愼重に手を盡して置くがよい。兎角青年は放漫粗大で、大事も小事のやうに見過し、爲し得る事をも勉めてしないやうな弊がある。

大事小事に就いて中村惕齋の有益なる教訓がある。

*京都の儒者 三八九—三三六二。

「君子の道、事に大小ありて理に大小なし。故に知り得て明らかに、養ひ得て熟すれば、小事を見ること猶大事のごとく、大事を見ること猶小事のごとし。蓋し人心多少を量つて分用するを得ず。故に事大小となく皆全體を以て之に應ず。唯輕重緩急、各其の宜しきに從ひて、之に處する心は一にして二ならず。衆人常に小事を輕んじて之を慢忽にす。大事に臨みて、往々其の節を失する所以なり。故に書に曰く、『細行を矜まざれば、終に大德を累す。』と。」此の惕齋の訓戒は粗放な青年に取つては殊に有益である。世の青年たるもの、自ら省みて警むる所がなければならぬ。（青年修養訓）

三　きぬた

しみづ　はまおみ

ちかし　と　きけば　とほし、とほし　と　きけば　ちかし。
しきる　も　たゆみ、たゆむ　も　また　しきる。かりがね
の　こゑ　の　きぬた　を　さそふ　にや　あらん、きぬた
の　おと　の　かりがね　に　かよふ　にや　あらん、あな
あやし。そも　この　おと　の　かなしき　か、すむ　さと
の　さびしき　か、うつ　をり　の　うき　ゆゑ　か。みな

あらず。きく　ひと　の　こゝろ　の　さびしき　なり。

（泊酒舍集）

四　秋の水

秋の水石ゐく魚の動ぶる　西行法師
月見る尾をちらげる鶴の都
雪ふるとて枝に残る花ゝ　尾崎紅葉
突きぐぐて紅葉を星間もれ　西蘭崎雪
寄氣まて仁王にせる若葉哉　佐々醒雪

風や秋国ゝゝ石を吹く　高濱虛子
雨雲の富士と沙弓や二ゝ谷　河東碧梧桐
うれあるれ松寄飯に豆腐汁　坂本四方太

五　千里が竹

近松門左衛門

その一

船路の末も知らぬ火の筑紫は雲に埋めども、跡に、擁護の神風や、千波萬波を押し切つて、時も違へず親子の船唐土の地につきにけり。鄭芝龍一官は故郷に歸る唐錦、裝束引換へ妻子に向ひ、「我が本國といひな

*鄭芝龍鄭成功父子。

(一)明朝に仕へて右軍の將となる。後、韃靼に內應して明帝を殺す。
(二)明朝の忠臣。仕へて司馬大將軍となる。
(三)錦祥女。
(四)明の將軍。後韃靼に降りしが、幾ならずして又之に叛き鄭芝龍に應ぜり。

がら、時移り、世變り、天下悉く李蹈天(一)が引入れにて韃靼夷の奴となり、昔の朋友・一族とて誰を尋ねんやうもなく、司馬將軍吳三桂(二)が生死の樣子も知らざれば、何を以て義兵の旗をあげ、何處の一城に立て籠るべき處もなし。然るに某去んぬる天啓五年、この國を立ちのき、日本へ渡る時、二歲になりし娘(三)の子を乳母の袖に捨置きしが、その子が母はうみ落して當座に死す。かくいふ父は八重の汐路の中絕えて、いつ父母も知らぬ身が、育てば育つ草木の雨露の恵に長ずる如く、天地の父母の助にや、成人して、今吳(四)將軍甘輝

といふ大名、一城の主の妻となりし由、商人の便に聞及ぶ。賴む方はこればかり。親を慕ふ心あつて娘さへ承引せば、聟の甘輝も安々と賴まるべし。これより道の程百八十里、連れては人も怪しまん。われ一人道をかへ、和藤內は家に憩ひ、追附くべし。これより先は音に聞ゆる千

近松門左衞門

母を具し、日本の漁船(レウセン)の吹流されしと頓智を以て人

里が竹とて虎の栖む大藪あり。それを過ぐれば潯陽の江。これ猩々の栖む處。風景聳えし高山は赤壁とて、昔東坡が配所ぞや。それよりは甘輝が在城獅子が城へは程もなし。その赤壁にて待揃へ、萬事を示合すべし。」と、方角とてもしら雲の日影を心おぼえにて、東西へこそ別れけれ。

教に任せ、和藤内、人家を求め忍ばんと、かひ〳〵しう母を負ひ、たづきも知らぬ岩巖石、古木の根ぎし瀧つ波、飛びこえ跳ねこえ飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明山、人里絶えて廣々たる千里が竹に迷ひ入る。和藤内ほうと我をぬかし、「のう母ぢや人、この腰骨に覺えたり、もう四五十里も來ませうが、人にも猿にも逢ふことか、行けば行く程藪の中。むう、わかつたり、方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅さば魅せ。宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯の相伴。」と、根笹・大竹押分け蹈分け、猶奥深く行くさきに、怪しや數萬の人聲。攻鼓・攻太鼓・喇叭・ちやるめら、高音をそらし、ひよう〳〵とこそ聞えけれ。「すは、我々を見咎めて、敵の取卷く攻太鼓か、又は狐のなすわざか。」と茫然たるその折節、空凄じく風起り、砂を穿ち、どうど

うどう、竹葉さつと卷立て卷立て、吹折る竹は劒の如く、凄じなんどもおろかなり。

和藤内ちつとも臆せず、「讀めたり、さては異國の虎狩なり。あの鐘・太鼓は勢子の者。こゝは聞ゆる千里が竹。虎嘯けば風起る。猛獸の所爲と覺えたり。

二十四孝の楊香は孝行の德に因つて自然と逃れし惡虎の難。その孝行には劣るとも、忠義に勇むわが勇力。唐へ渡つて力始め、神力まします日本刀、刃で向ふは大人氣なし、虎は愚、象でも鬼でも一挫ぎ。」と、尻ひつからげ、身繕ひ、母をかこうて立つたるは西天の

(一)虎嘯谷風起、龍興景雲浮。
(二)晉の人。赤手虎を搏して父の危を救ふ。

師子王も畏れつべうぞ見えてける。

案に違はず吹く風と共に暴れたる猛虎のかたち、藤根に面をすりつけすりつけ、岩角に爪磨ぎ立て、二人を目がけいがみ懸るを事ともせず、弓手に擲り、馬手に受け、捩つて懸れば身をかはし、撓めばひらりと乘移り、上になり下になり、命競べ根競べ、聲を力にえいえいく、虎の怒り毛、怒り聲、山も崩るゝごとくなり。

和藤内も大童、虎も半分毛を毟られ、兩方共に息つかれ、石上に突つ立てば、虎も岩間に小首を投げ、大息ついたるその響、鞴吹くが如くなり。

母藪蔭より走りいで、「やあ〳〵和藤内、神國に生れて神より受けし身體髪膚、畜類に出であひ力立てして怪我するな。日本の地は離るゝとも、神はわが身に五十鈴川、大神宮の御祓、納受などか無からんや。」と、肌の守を渡さるれば、「げに尤も」と押戴き、虎に差向け差上ぐれば、神國神祕のその不思議、猛りに猛る勢も、忽ち尾を伏せ耳を垂れ、じり〳〵と四足を縮め、恐れわなゝき、岩洞に匿れ入る。をづつを攫んで跳ね返し、うち伏せうち伏せ、ひるむ所を乘つ懸り、足下にしつかと蹈まへしは、天の斑駒、素戔嗚尊の神力、天照らす神の威德ぞ有難き。

六　千里が竹その二

近松門左衛門

かゝる所に勢子のものの羣がり來るその中に、大將と覺しき者大音擧げ、「やあ〳〵、うぬはいづくの風來人、我が高名を妨ぐる。その虎は忝くも主君右將軍李蹈天より韃靼王へ獻上のため狩出したるものなるぞ。早々渡せ。異議に及ばゝ打殺さん。」じやくはん、じやくはん。」とわめきける。李蹈天と聞くよりも願ふ所と笑壺に入り、「やあ、餓鬼も人數、しをらしい事

ほざいたり。身が生國は大日本。風來とは舌長し。さほど欲しがる虎ならば、主君と賴む李蹈天とやら、石花菜とやら、こゝへつき出し、詫言させい。直に逢うて用もある。さもないうちは、いつかなこと、ならぬ、ならぬ。」とねめつくる。「やあ、物ないはせそ。打取れ。」と、一度に劒をばらりと拔く。「心得たり。」と護符を虎の首にかけ、母の側にひつすうれば、繫ぎしごとくにはたらかず。「おゝ心易し。」と太刀差翳し、羣がる中へ割つて入り、八方無盡に割りたて割りたて、撫でまくる。

勢子の大將安大人、官人引具し立歸り、「おのれ老耄餘さじ。」と一文字に切りかゝる、猶も神明擁護の驗、神力虎に加つて、むつくと起きて身慄し、敵に向ひ齒を鳴らし、猛りうなりて飛蒐る。「こは適はじ。」と安大人、勢子の差いたる劒かり鉾數槍、手にあたるを幸に、投附け投附け打ちかくる。虎は神力自在を得、劒を宙に引つ喰へ、岩に投げあて、微塵になす。刃の光玉散る霰、冰を碎くに異ならず。刃物盡くれば、官人ども、色めき立つて逃げ迷ふ。後より和藤内、「どつこい遣らぬ。」と顯れいでて、安大人が素首を掴んでさし上げ、

くるくると振りまはし、えいやつと打ちつくれば、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて失せにける。

此の勢に官人原、後へ戻れば、惡虎の口、先へ行けば和藤内、仁王立に突つ立ちたり。「あゝ、申し御堪忍、御免御免。」と手をあはせ、土に喰ひつき泣きゐたり。和藤内虎の背を撫で、「うぬらが小國とて侮る日本人、虎さへこはがる日本の手練を覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官が忰、九州平戸に生長せし和藤内とは我が事なり。先帝の妹宮、栴檀皇女に巡り逢ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故郷へ立歸り、國の亂を

治むるなり。さあ、命惜しくば身方につけ。否といへば虎の餌食。否か、應か。」とつめかくる。「喃、何の否で御座りませう。韃靼王に從ふも、李蹈天に從ふも、命が惜しさ。向後お前の御家來ども、お情賴み奉る。」と地に鼻つけて畏まる。

「おゝ出來したく。さりながら我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召使はん。」と、指添の小刀はづさせ、これも當座の早剃刀、母も手々に受取つて、竝ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理無體、片端そるやらこぼつやら、絲鬢、厚鬢、剃刀次

第、瞬くひまに剃りしまひ、二櫛半のばらけ髪、頭は日本、髭は鞣鞣、身は唐人、互に顔を見合せて、頭冷つく風引いて、「嚏々、村雨々々。」と、涙を流すぞ道理なる。

親子どつと打笑ひ、揃ひも揃うた供廻り、名も日本に改めて、何左衞門・何兵衞・太郎・次郎・十郎まで、面々國所頭字に名乘り、二行に立つてぼつたてろ。「承り候。」と、お先手の手振の衆、ちやぐちう左衞門・東蒲塞右衞門・呂宋兵衞・東京兵衞・暹羅太郎・占城次郎・ちやるなん四郎・ほるなん五郎・うんすん六郎・すん吉郎・もうる左衞門・ぢやが太郎兵衞・さんとめ八郎・英吉利兵衞、今參のお供先、あとに引馬、虎斑の駒、母を助けて孝行の名を取り、口取り、國を取る、譽は異國・本朝にふみまたげたる鞍鐙、虎の脊中にうちのつて、威勢を千里にあらはせり。（國姓爺合戰）

七 月の洞庭湖

佐々木信綱

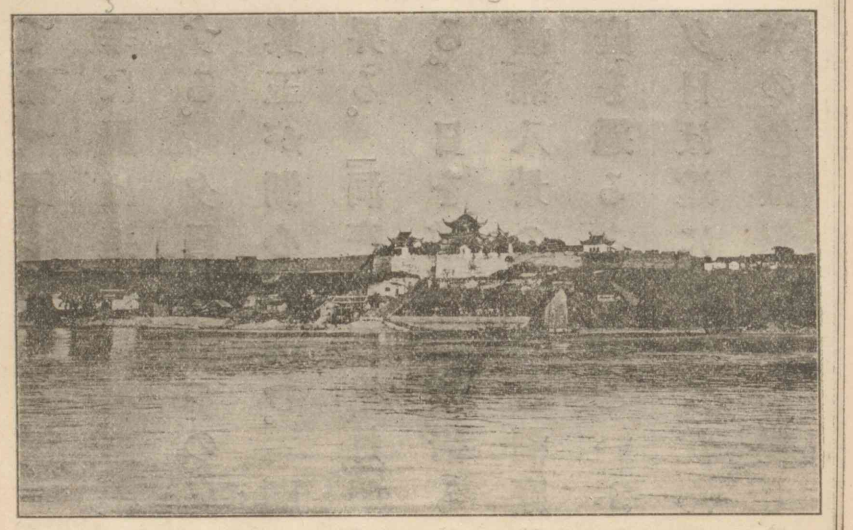
岳陽樓は岳州府城の城壁の東の隅に建つてゐる三層樓である。城壁の甎瓦は幾百年の風霜に黑ずんでゐる。建て直してまだ久しからぬ岳陽樓は、金碧燦爛として輝いてゐる。その色彩の配合が極めて

美觀である。

船を捨てゝ上陸すると、岸邊のこゝかしこに小屋がある。それは蘆のまろ屋とでもいひさうな、蘆で蒲鉾形に葺いた低い家である。その間を通りぬけて、高い石段をあがり、城門をぬけて岳陽樓を訪うた。

案内の僧に導かれ、壁に題した詩や聯の句などを讀んで三層樓の上に登つた。かの范文正公がこゝの記*を書いて後、この樓は幾度か重修し、人は變り、世は遷つても、天然の景には變遷がない。唯見る、浩々湯湯、洞庭湖は目の前に天地の大幅をひろげてゐる。

*銜遠山呑長江、浩々湯々、横無際涯。朝暉夕陰、氣象萬千。此則岳陽樓之大觀也。



湖の門戸には彼の堯の女湘君が居たといふ君山が右に、扁山が左に、何れも江岳の島位の大きさの島で、さながら洞庭宮を守る獅子・狛犬の如くである。今や夕日は其の眞中に落ちようとしてゐる。天地の大觀に覺えず吾を忘れて眺めて居たが、促したてられ

て、船へ歸つた。

幸に風は追手。帆を張つて愈〻洞庭湖を横ぎらうとする。夕日は二つの島の間に落ちて、見る〳〵紅の眞玉が湖心に沈む。顧みれば岳州府城の上に月が昇る。「洞庭八百里、月照岳陽城。」といふ詩の通りである。日を數へれば恰も舊曆十月十五日の夜で、かの瀟湘八景の一なる洞庭秋月ではないが、望月の夜、洞庭を過るとは何といふ好因縁であらう。

夕日は遂に湖心に沈んだ。其の餘光が空に輝くと、空の色は忽ち紅に變じ、其の紅の色は湖上に映じて、

*平沙落鴈。遠浦歸帆。山市晴嵐。江天暮雪。洞庭秋月。瀟湘夜雨。煙寺晩鐘。漁村夕陽。

畫にも寫しがたく麗しい中を、遙かに一帆、又一帆、風のまに〳〵、遠く、近く、かつ顯れ、かつ消える。そのいひ知らぬ風景、寧ろかういふ風景の中に包まれながら、湖の底深く沈んだならばと思はれる。

美しかつた夕映も光を失つて、湖の上は薄暗くなる。月は愈〻澄み上る。見えるものは唯黄金・白銀の波。「浮光躍金。」といふ有樣である。廣い果知らぬ湖の上、進み行く我が船の近くに二三の釣舟が居る。昔、卓彦恭といふ人が洞庭を過ぎた時、月下に釣せる小舟を呼びとめて、「魚ありや、否や。」と問うたに、老人らしい

(一)岳陽樓記の句。
(二)宋の人。傳闕く。

聲で、「魚はないが詩がある。」卓喜んで「願はくは一篇を聞かん。」老人枻を鼓ちて、

八十滄浪一老翁、蘆花江上水連空。
世間多少乘除事、良夜月明收釣筒。

と高吟し去つたといふ。さる風流の漁翁のありやなしやは知らぬが、二三の小さな釣舟は、たしかに大いなる湖の月夜の景趣を添へるのであつた。

月は良く、風は追手。船は帆腹飽滿、一瞬千里の勢で進む。夜はふける。月は愈〻澄む。此の意人の識るなし。」いひしらぬ樂しさ、寂しさ、何ともいひ難き感

が胸に充ちて、我が身そゞろに吾あるを知らず、此の隈なき月と果なき湖とに對して居た。一昨年の初秋、富士に登つて、絶頂に見た七月十七夜の月。かれは山頂、これは湖上。しかし、あはれは同じあはれで、風月の緣に富むことを天に謝したことであつた。

（帝國文學）

八 相模灘の落日

徳富蘆花

秋冬、風全く凪ぎ、天に一片の雲なき夕べ、立つて伊豆の山に落つる日を望むに、世にかゝる平和のまた多

かるべしとも思はれず。

日の山に落ちかゝりてより、其の全く沈み了るまで三分時を要す。日の西に傾くや、富士を始め相豆の連山煙の如く淡し。日は謂はゆる白日、白光爛として眩し。日更に傾くや、富士を始め相豆の連山次第に紫になるなり。

日更に傾くや、富士を始め相豆の連山、紫の肌に金煙を帶ぶ。此の時、濱に立つて望めば、落日海に流れて吾が足下に到り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱一帶、山と云はず、沙と云はず、家と云はず、松と云はず、

人と云はず、轉りたる生簀の籠も、落ち散りたる棄屑も、赫焉として燃えざるはなし。

かゝる凪の夕べに落日を見る身は、恰も大聖の臨終に侍する感あり。莊嚴の極、平和の至、凡夫も靈光に包まれて肉融け、靈獨り端然として永遠の濱に往むを覺ゆ。物あり、融然として心に浸む。喜と云はんは過ぎ、哀れと云はんは未だ及ばず。

已にして日愈〻落ちて伊豆の山にかゝるや、相豆の山忽ちにして印度藍色に變ず。唯富士の巔舊に仍つて紫の上に更に金光を帶ぶるのみ。伊豆の山已に

落日を銜み始めぬ。日一分を落つれば、海に浮べる落日の影一里を退く。日は迫らず、分又分、寸又寸、別れ行く世をば顧みがちに悠々として落ち行く。已にして殘り一分となるや、急に落ちて眉となり、眉切れて線となり、線瘠せて點となり、忽ちにして無し。眼を上ぐれば世界に日なし。光消えて、海も山も蒼然として憂ふ。日は入りぬ。然も餘光の忽ち箭の如く上射し、西の空、金よりも黄なるを見ずや。偉人の歿せる後、實にかくの如し。

日の落ちたる後は、富士も程なく蒼ざめ、やがて西空の金は朱となり、燻りたる樺となり、上りては濃きプロシア藍色となり、日の遺槩とも思はるゝ明星の、次第に暮れ行く相模灘の上に眼を開きて、明日の出日を約するが如きを見るなり。（自然と人生）

九　光頼卿の參内

さる程に、内裏には同じき十九日公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿この程は信頼卿の振舞過分なりとて、不參にておはしましけるが、參内して承らんとて、殊に鮮かに束帶引繕ひ、蒔繪の細太

（一）二條天皇平治元年十二月。
（二）右衛門督藤原信頼。

刀おとなしやかに佩き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に腹巻著せ、雜色の裝束にいでたゝせ、「自然の事もあらば、人手に懸くな、汝が手に懸けて光頼が首をばいそぎ取れ。」とて御身近く置き、その外、清げなる雜色四五人召具して、大軍陣を張

（裝束著用圖）帶束

りて處々門々を堅く守護しけるを事ともせず、さきに高らかに追はせて入りたまへば、兵どもゝ大いに恐れ奉り、弓を平め、矢をそばめて通し奉る。

紫宸殿の後を經て殿上を廻りて見たまへば、信頼卿一座して、その座の上﨟たち皆下にぞ著かれける。光頼卿「こは不思議のことかな。人はいかにふるまふとも、彼は右衞門督、我は左衞門督なれば、下には著くまじきものを。」と思はれければ、左大辨宰相長方卿末座の宰相にておはしましけるに、「今日の御座席こそよにしどけなう見え候へ。」と色代して、しづくと

*宰相は參議の唐名。定員八人。

歩み、信頼卿の上にむづと著きたまふ。光頼卿は信頼卿のためには母方の叔父なる上、大力の剛の人なれば、ことに恐れて見えられたり。右の袖の上に居懸けられて、伏し目になりて色を失はれければ、著座の公卿、「あなあさまし。」と見たまふに、光頼卿下襲ねの尻引直し、衣紋繕ひ、笏取直し、氣色して、「今日は衛府督が一座すると見えて候。召に參ぜざらんものをば死罪に行はるべしとやらん承りて、參内する所なり。抑、何事の御諚ぞ。」と問ひけれども、信頼卿ものも宣はず、著座の公卿も一言の返答なかりけ

れば、まして僉議の沙汰もなし。程經て光頼卿ついに立ちて「惡しう參つて候ひけり。」とて、しづ〳〵と歩みいでられけり。

庭上にみちく〳〵たる兵ども、これを見奉りて、「あはれ、この殿は大剛の人かな。去んぬる十日(一)より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に著く人一人もおはしまさゞりつるに、しいだしたることよ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あはれ、この人を大將として合戰せば、いかばかりかは頼もしからん。」と申せば、傍なるものゝ、「昔頼光(二)・頼信と

(一) 除目ありし翌日。

(二) 共に多田源氏満仲の子。

て源氏の名將おはしまし。その賴光をうち返して光賴と名のり給へばこれも剛にましますぞかし。」といへば、また傍より「など、その賴信をうち返して信賴とつき給ふ右衞門督殿は、あれほど臆病にはおはしますぞ。」といへば、『壁に耳、天に口。』といふことあり。おそろし、おそろし、聞かじ。」といひながら、皆忍び笑ひに笑ひけり。

光賴卿かやうにふるまひたまへども、急ぎても出でられず、殿上の小蔀の前、見參の板、高らかに蹈鳴らして立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩戸の邊に弟の別當惟方のおはしけるを招寄せ宣ひけるは、「公卿僉議とて催されつる間、參じたれども、承り定めたる事もなし。誠やらん、光賴も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きはその人皆當時の有識、然るべき人どもなり。その内に入らんこと甚だ面目なるべし。さても先日、右衞門督が車の尻に乘つて、少納言入道が首實檢のため

(一)左兵衞督檢非違使別當藤原惟方。

(二)少納言藤原通憲入道して信西といふ。

清涼殿（内裏圖）

に、神樂岡へ向はれけることはいかに。以ての外、然るべからざる振舞かな。近衞大將・檢非違使別當は他に異なる重職なり。その職に居ながら人の車の尻に乘りたまふこと、先蹤も未だ聞及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中、首實檢は甚だ穩便ならず。」と宣へば、別當、「それは天氣にて候ひしかば。」とて赤面せられけり。

光賴卿重ねて「こはいかに、敕諚なればとて、いかで存ずる旨を一議申さゞるべき。我等が曩祖勸修寺内大臣・三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君既

洛東吉田神社の邊に在り。

藤原高藤。

高藤の子定方。

に十九代、臣又十一代、承り行ふことは皆これ德政なり、一度も惡事に從はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴つて讒佞の輩に與せざりしゆゑに、昔より今に至るまで人にさしもどかるゝ程の事はなかりしに、御邊始めて暴惡の臣に語らはれて、累家の住名を失はんこと、口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして切目の宿より馳せ上るなるが、和泉・紀伊・伊賀・伊勢の家人ら待ちうけて大勢にてあなる。信賴卿が語らふ所の兵そこばくならじ。平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻を

紀伊國日高郡に在り。

や回らすべき。もし又火などをかけなば、君もいかでか安穩に渡らせたまふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかにいはんや、君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべし。右衞門督は御邊に大小事を申しあはすとこそ聞ゆれ。相構へて〳〵、隙を伺ひ、玉體恙なくおはしますべき様思案せらるべし。さて主上は何處におはしますぞ。「黑戸御所に。」「上皇は。」「一本御書所に。」「内侍所は。」「溫明殿に。」「劒璽は何處に。」「夜の大殿に。」と左衞門督次第に尋ねたまひければ、別當かくぞ答へられける。

又「朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」と宣へば「それは右衞門督住み候へばその方様の女房などぞかげろひ候ふらん。」と申されければ、光頼卿聞きも敢へず、「世の中は今はかくござんなれ。主上の渡らせたまふべき朝餉には信頼住み、君をば黑戸御所に遷し參らせたり。末代なれども、流石に日月は未だ地に落ちたまはぬものを、天照大神・正八幡宮は王法をいかゞ守りたまひぬるぞ。異國にはかやうの例ありと雖も、我が朝にて未だかくの如き

先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。」とて、のろのろしげに憚る所なく口説きたまへば、惟方は「人もや聞くらん。」と、よにすさまじげにて立たれけれども、且は悲しくて、「我いかなる宿業によつてかゝる世に生れ合ひ憂き事をのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を聞かん輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。」とて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信頼の座上に著かせられし時はさしもゆゝしく見えたまひしが、君の御事をかなしみて、うち萎れてぞ出でたまひける。（平治物語）

一〇 常磐木

島崎藤村

あら雄々しきかな、傷ましきかな、
かの常磐木のとはに枯れざる。
常磐木の枯れざるは、
百千の草の枯るゝより
傷ましきかな。
其の枝にかゝる朝の日、
其の幹をめぐる夕月、
など行く旅の迅速なるや、

など電の影と馳するや。
蝶の舞、花の笑、
など遊ぶ日の世に短きや、
など其の醉の早く醒むるや。
蟲、草の葉に悲しめば、
一時にして既に霜。
鳥、潮の音に驚けば、
一時にして既に雪。
木枯高く秋落ちて、
自然の色はあせゆけど、

大力天を貫きて、
坤軸遂にやすみなし。
ものみな速くうらがれて、
長き寒さも知らぬ間に、
寒千歳の時に嘯き、
獨り立てるは何の力ぞ。
白銀の花霏々として
吹雪の煙暗き時、
汝綠の陰も朽ちせず、
空を凌ぐは何の力ぞ。

立てよ、友なき野邊の帝王、
ゆゝしく高く立てよ、常磐木。
汝の長き春なくば、
山の命も老いなんか。
汝の深き息なくば、
谷の響も絶えなんか。
あしたには葉をうつ霙、
ゆふべには枝うつ霜、
千草も知らぬ冬の日の
嵐に咽ぶうきなやみ、

いづれの日にか
氷は解けて、
その葉の涙
消えんとすらん。
あゝ、よし、さらば、枝も摧けて、
緑の色の褪せなん日まで、
雲浮かば無縫の天衣、
風立てば不朽の緒琴、
おごそかに立てよ、常磐木。
あら、雄々しきかな、傷ましきかな。

かの常磐木のとはに枯れざる。
常磐木の枯れざるは、
百千の草の枯るゝより
傷ましきかな。（藤村詩集）

一一　佐那田餘一　その一

(一)兵衛佐殿仰に、「武藏・相模に聞ゆる者どもは皆ありと覺ゆ。中にも大庭・(二)俣野兄弟先陣と見えたり。此等に誰をか組ますべき。」と宣へば、(三)岡崎四郎義實申しけるは、「弓矢を取つて戰場に出づる程の者、敵一人に組

(一)右兵衛權佐源頼朝。
(二)大庭三郎景親。
(三)俣野五郎景久。
(四)三浦大介義明の弟。

まぬ者やは侍るべき。親の身にて申す事、人の嘲を顧みざるに似たれども、存ずる所を申さゞらんも卻つて又私あるに似たるべし。*義忠は此の間大事の所勞仕つて未だ力つかずや侍らめども、心しぶとき奴にて、弓箭取つては等倫に劣るべからず。其の器に侍り。仰せ含められるべきか。」と申しければ、やがて義忠を召してけり。

餘一其の日の裝束には、青地の錦の直垂に、赤縅の肩白の鎧の裾金物打つたるを著て、つま黑の箭負ひ、長覆輪の劒を佩きけり。折烏帽子を引立て弓を平め、

*佐那田餘一義忠。岡崎四郎義實の子。

跪きて將軍の前に平伏せり。白葦毛なる馬をぞ引かせたる。其の體あたりを拂つてぞ見えし。

兵衞佐、佐那田に宣ひけるは、「大庭・俣野は名ある奴原なり。今日の軍の先陣仕つて、彼等二人が間に組め。源氏の軍の手合なり、高名せよ。」とぞ宣ひける。餘一仰を蒙り、畏つて御前を立ち、郎等に文三家安と云ふ者を招き寄せて、義忠が母又子どもが母にも語るべしとて云ひけるは、「一昨日打出でしを最後と思ひ給ふべし。兵衞佐殿、今度の軍の先陣勤めよと直に仰せたびたれば、多くの人の中に擇ばれたる事、弓矢取

る身の面目なり。されば命を限に戰はんずれば、生きて再び歸る事よもあらじ。豫て斯くと知り侍らば、何事も申し置くべかりけり。其の事今は力無し。我討たれぬと聞き給ひなば、母御前の御歎こそ思ひ殘し奉れ。縱ひ我死したりとも、世の靜まらん程は、二人の稚き者をば如何ならん野の末山の奥にも隱し置きて、佐殿の世に立ち給うたらん時、先祖なればこ岡崎と佐那田とをば申し賜はりて、兄弟に知らせてたび候へ。さては女房も子供が後見しておはしませ。佛に花香進らせて後の世弔ひ給へ。父岡崎殿

(一)(二) 共に相模國中郡に在り。

も佐殿の御供なれば、軍の習生死を知らず、女性は何事か有るべきなれば、斯く申置くなり。』と慥に云ひ傳ふべし。又汝も稚き者ども不便に育て、世にあらば憑め、世になくば憫みて義忠が形見とも思へ。」など云ひければ、文三申しけるは、「殿の二歳の時より、家安親代と成つて、夜は胸にかゝへ奉つて夜もすがら勞り、晝は肩にのせ日ねもすに育み奉る。早く成人し給うて、人に勝れ給はん事を願ひき。五六歳になり給ひしかば、竹の小弓に小竹矧の矢、的草鹿、兎こそ射れ角こそ射れ、馬に乘つては兎こそ馳すれ角こそ馳すれと教へ育て奉りぬ。殿は今年二十五、家安五十七に罷成る。若き人だに主命とて先陣を蒐けて死なんと宣ふ。殿を見捨てゝ、家安が生殘りては何かせん。又人の言はん事こそ恥しけれ。」佐那田餘一の最期には恥ある郎等身に副はず。文三家安が如何程命を生きんとてか最期の軍に主を捨てゝ逃げたりけん。』と申さん事も口惜し。死なば一所の討死なり、左樣の事をば誰にも仰せられよかし。」とて、三郎丸といふ童を招き寄せ、申含めて遣しけり。

餘一既に打出でければ、佐殿は「義忠が裝束毛早に見

ゆ、著替へよかし。」と宣へば、餘一は「弓矢取る身の晴振舞軍場に過ぎたる事候まじ、尤も願ふ所に侍り。」とて、十五騎の勢を相具して進み出でて申しけるは、「源氏世を取り給ふべき軍の先陣承つて、蒐出でたるを誰とか思ふ。音にも聞くらん、目にも見よ、三浦介義明の弟に、本は三浦惡四郎、今は岡崎四郎義實、其の嫡子に佐那田餘一義忠、生年二十五。我と思はん人々は組めやく。」とて叫んで蒐く。弓手は海、馬手は山、闇さは闇し、雨は射に射て降る、道は狹し、馬に任せてぞかけ行きける。

平家方より、「餘一は善き敵ぞ、餘すな。」とて進む者共には、大庭三郎景親・俣野五郎景久・長尾新五・新六・八木下五郎・漢楊五郎・荻野五郎・曾我太郎・原宗四郎・澀谷莊司・瀧口三郎・稻毛三郎・久下權頭・淺間三郎・廣瀨太郎・岡部六彌太・同彌次郎・熊谷次郎等を先として究竟の兵七十三騎、佐那田一人に組まんとて我先にく と逸れども、闇さは闇し、道は狹し、馬次第にぞ打つたりける。

一二　佐那田餘一　その二

*治承四年八月二十三日。

*二十三日の黃昏時の事なれば、敵も味方も見え分か

ず。餘一は文三を呼んで、「家安慥に聞け、我は相構へて大庭・俣野が間に組まんと思ふなり。組む程ならば急ぎ落合ひて敵の首を取れ。此の間の勞りに力無く覺ゆれば、豫て云ふぞ。」と云ふ。文三「誰もさこそ存じ候へ。殿の大庭に組み給はゞ家安は俣野、我大庭に組み候はゞ殿は俣野に組み給へ。」とて進む處に、岡部彌次郎、餘一に組まんと志して、鹿毛なる馬に乘つて馳せ來る。餘一は岡部とは思ひ寄らず、大庭か俣野かと思ひ、馳寄りて兜の天邊に手を打入れて鞍の前輪に引付けて頸を搔き、取上げて雲透に見れば、

思ふ敵にはあらずして岡部彌次郎なり。「あな無慙や、鹿待つ處の狸とは此の事にや。何しに來つて義忠に打たるらん。」とて首をば谷へぞ拋入れける。餘一が乘つたる馬は、白葦毛太く逞しきが七寸に餘りて、鼻の先瓠の花の如く白かりければ、名をば夕顏と云ふ、東國一の強馬なり。もと三浦介が許にありけるが、餘りに強くて輙く乘る者無かりけるを、岡崎所望して乘りけるが、其も進退し煩ひたりけるに餘一ばかりぞ乘從へたりける。されども岡崎持和げて三浦へ返したれば、本の栖處へ歸つたりとて都返

りと名づけたり。佐那田、折節馬無くて又乞返したれば、古巣へ歸つたりとて鶯とも呼びけり。元來強き馬なりけれども、己が力を憑みつゝ、出雲轡の大きなるに手綱二筋縒合せてぞ乘つたりける。岡部彌次郎が首切りける時、鎧武者の身の落つるに驚きて、つと出でて走り行く。さる者ぞと心得て、引留めん引留めんとしけれども、此の馬の癖として、口をば主に打ちくれて胃にて走る馬なりけり。猶留めんと引く程に手綱三つに切れければ、左右の水付執へたり。左右の水付引捲ぎて、心の儘に引きて行く。

大庭三郎は弟の俣野五郎に「構へて餘一に組み給へ、景親も目に懸らば組まんずるぞ。」と云ふ。俣野は「餘りに闇くて敵も味方も見えわかず、餘一も何處やらん。」と云へば、餘一が鎧は裾金物の殊にきらめきて、馬の毛も白かりき。白き幌を懸けたりつれば、著しかりつるなり。」と教ふ。俣野馳出でぬ。餘一馬に引かれて近づきたり。俣野敵の寄すると思ひければ、「佐那田餘一義忠と名乘りつるは落ちぬるか。」と呼びけり。無下に近かりければ、「義忠此處にあり。問ふは誰そ」。「俣野五郎景久。」と名乘るや遲き、押並べて馬の

閒へ落重る。上に成り下に成り、駢返し持返し、山の
岨を下りに大道まで四段計りぞ轉びたる。今一返
しも轉びなば互に海へは入りなまし。
俣野は大力と聞くに、如何したりけん下に推附けら
れてうつぶしに臥し、頭は下に、足は上に、起きん〳〵
としけれども力無かりける。餘一は上にひたと乘
り得て、「義忠敵に組みたり、落重れ〳〵。」と呼びけれど
も、家安を始めとして郎等ども押隔てられて續く者
なし。俣野今は叶はじと思ひて、「景久、佐那田に組み
たり。續けや〳〵。」と呼びけるに、長尾新五聲につき

佐那田與一組打の遺蹟

て落合ひて、「上や敵、下や敵。」
と問ふ。餘一は上に乘り
ながら、「斯く宣ふは長尾殿
か。上ぞ景久、下ぞ餘一、過
し給ふな。」と云ふ。俣野下
にて、「上ぞ餘一、下ぞ景久、過
すな。」と云ふ。頭は一所に
あり、闇さは闇し、聲は息突
きて分明に聞分かず。上
よ下よと論じければ、思ひ

わびてぞ立つたりける。

俣野「あな不覺の殿や、聲にても聞き知りなん。鎧の毛をも探り給へかし。」と云ふ。長尾誠にと思ひて鎧の毛をぞ探りける。餘一顯れぬと思ひて、右の足を揚げて長尾をむづと蹈む。蹈まれて下りに弓長三杖ばかりとゞ走りて倒れにけり。其の間に餘一刀を拔いて俣野が首を搔く。搔けども〳〵切れず、刺せども刺せども通らず。餘一刀を持揚げて雲透に見れば、鞘卷の栗形缺けて、鞘ながら拔けたりけり。鞘尻くはへて拔かんとしけれども、運の極の

悲しさは、岡部彌次郎が首切りたりける刀を拭はず鞘に差したれば、血詰りして拔けざりけり。長尾新五が弟に新六落合ひて、餘一が胡籙の間にひたと乘得て、兜の天邊を引仰けて頭を搔く。無慙と云ふもおろかなり。俣野を引起して、「いかに手や負ひたる。」と問へば、「首こそ重く覺ゆれ。」と云ふ。頸を探ればぬれぬれとあり。手負うたるにこそとて餘一が刀を見れば、鞘尻一寸ばかり碎けたり、強く刺したりと覺えたり。其の後俣野は軍はせず、「佐那田餘一は俣野五郎止めたり。」と叫びければ、源氏方には惜みけり、

平家方には之を悅びけり。（源平盛衰記）

一三　文學と氣品

芳賀矢一

文學といふものは、國家から見れば、國民精神の宿る所で、個人から見れば、高尙な氣品の流露である。立派な文學のある國は其の國の品格も一段と高く見え、文學の嗜がある偉人は一入懷かしい心持がする。魏の曹操は其の仕事の上から見てあまり好かれぬ人物であるが、槊を横たへて「月明かに星希に。」と歌つた一事を想ひ出すと、何となく慕はしくなつて來る。

短歌行に「月明星希、烏鵲南飛。」

普魯西のフレデリック大王は賢君として名高い王様であるが、其のサンスシイ宮の中に佛國の文豪と交つて、靜かに文學に耽られた事を考へると、尙更貴い感じを起す。英雄閑日月ありといふ語がしみじみと身に染みて景慕の念を生ずる。

源頼光や頼信よりも八幡太郎義家の方がえらく思はれるのは、勿來關に馬を停めて「道もせに散る山櫻かな。」と詠んだ風流、衣川に矢を番つて「衣のたてはほころびにけり。」と呼止めた情致がある爲で、これは其の後の爲義にも爲朝にも義朝・義平にも眞似の出來

伯林の近くポツダムに在り。

吹く風をなこその關と思へども道もせに散る山櫻かな。

年をへし絲のみだれの苦しさに衣のたては綻びにけり。

(一)登るべき便なき身は木の下にしひを拾ひて世を渡るかな。
(二)時鳥名をも雲井にあぐるかな、弓張月のいるに任せて。
(三)埋木の花さくこともなかりしにみのなる果ぞかなしかりける。
(四)とても世にながらふべくもあらぬ身の假のちぎりをいかで結ばん。

ぬところ。　源三位頼政の「しひを拾ひて世を渡るかな。」は少しいやになるが、「弓張月のいるに任せて」、「埋木の花さくこともなかりしに。」などの韻事があつた爲に、後世にまでその名が高くなつたのであらう。小楠公をして一層美的ならしめるのは、「假の契りをいかで結ばん。」の歌と「梓弓無き數にいる。」の辭世とである。　平忠盛に「波ばかりこそよると見えしか。」の風流があつて、眇の俄殿上人も優にやさしい感じを與へる。　これは淨海入道の及ぶ所では無い。　頼朝の「陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ。」をおもへば、義經や

(五)歸らじとかねて思へば梓弓なき數に入る名をぞ留むる。
(六)有明の月もあかしの浦風に波ばかりこそよると見えしか
(七)陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ書きつくして壺のいしぶみ。

範頼を殺す程の人とは思はれぬ。　西行法師との談話にも幾分の風流譚が交つて居たらうと想像される。　其の子實朝に至つては更に歌の名手。　これは源氏の武將中の第一で、曩祖八幡太郎の文學的方面は、こゝに最大の發達を遂げて居る。　頼朝の霸業は三代で亡びたが、實朝の文學は千古不朽である。　すべて文學の專門家のは、專門家として見るから當然の事に思ふが、政治家なり武人なり他の方面の人で風流譚のあるのは非常に其の人品を高くするもので、時には其の人の闕點まで掩ふやうな心持がする。

實朝が源氏の末路を飾ると同じやうに、平家の末路を飾るものは薩摩守忠度である。平家の公達には歌を詠んだ人は澤山あるが、忠度が都落に馬を乘返して俊成卿の門を叩いた一話は、最も麗はしい永久の語草である。

武士は情を知らなければならぬ、武人として文事の嗜がなくてはならぬとは、武家の家訓として必ず教へた事柄である。武田氏・北條氏・長曾我部氏・加藤氏等の家訓皆之を歌つて居る。それであるから戰國時代にも風流の心得のある武人が中々に多い。承

久の役に院宣を讀み得る人が無かつたなどといふのは、本當の武士の無かつた證據。北條氏康・毛利元就・太田道灌などは皆和歌風流の嗜が深かつた。豐臣秀吉を無風流の人と思ふのは大閒違、吉野の花見には諸大名もそれ〴〵詠歌をものして居る。上杉謙信が「霜滿軍營」の一吟は人をしてまづ之に同情せしめる所以で、其の襟度の遙かに武田信玄以上だと思はしめる最大原因となつて居る。其の家來の直江兼續も文學の素養から其の風采を想望せしめる。多くの傳說を集め得た源義經や、武將の典型と見ら

れた加藤清正に、風流韻事の傳はらないのは何となく物足らない心地がする。梶原景時・明智光秀の時にとつての連歌などが、やゝ其の憎しみを減じさせるのも、文學のお蔭と謂はねばならぬ。

幕末の志士は必ず何物かを口吟んで居る。藤田東湖などは其の尤なるもので、梅田雲濱の「妻臥病牀兒泣飢。」橋本景岳の「始知松柏後凋心。」賴三樹三郎の「誰題日本古狂生」をはじめ、佐久間象山でも吉田松陰でも僧月照でも伴林光平でも乃至は望東尼でも、或は詩に或は歌に、其の心事は永く其の文學に傳はつて忘れようとしても忘れられないやうになつて居る。

是等の志士は天下の憂に先だつて憂へた人、其の志を繼いだ人々が、卻つて明治の世には公となり侯となり伯となつて榮爵を辱うしたが、そんな人よりも、一片の詩一首の歌を留めて國難に斃れた人の方が、千秋萬古人の情緒を動かすであらう。

文學は廣い意味でいへば固より詩歌のみに限らぬ。併し日本では文學の他の方面は從來閑卻せられて居つたので、小說や戲曲に意見を吐露したり理想を披瀝したりする事は無かつた。これからはそれも

出來よう。政治家でも實業家でも武人でも、後世に名を殘さうと思ふ人は、文學に筆を染めることに心掛けるがよい、否々平生から文學に心掛ける程の襟度の人であつて、始めて立派な武人にも政治家にも實業家にもなれるのであらう。余は此の點から故伊藤公や乃木大將に一層深い敬意を表するのである。（筆のまに〳〵）

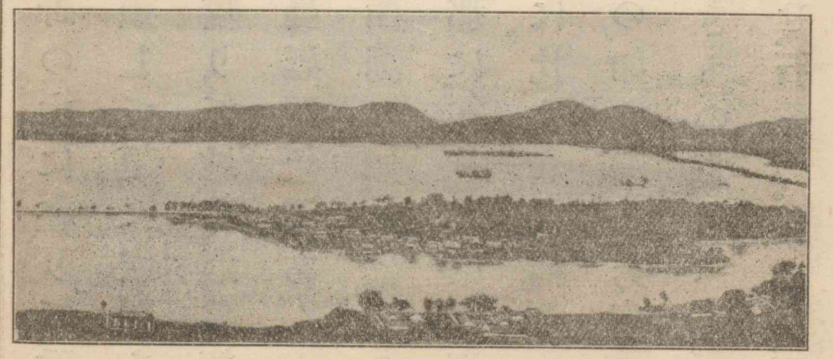
一四　南清の風景

内藤湖南

京・津地方はその趣朔漠に近く、我が邦に在りては比較すべき地なし。上海・蘇州は平野の中に在りて、猶大陸の風あり。刀根沿岸地方に類して更に宏闊を加ふ。獨り杭州地方は山迫り、海繞りて、地勢逼隘、頗る我が邦に似たり。城壁は女蘿蔓延翠色滴らんと欲し、亦北方枯燥の比にあらず。西湖の如きは、その景致殆ど我が京畿・中國に類し、支那に在りては明媚秀麗の最たるもの。而も我が邦に比すれば、猶やゝ暗澹たるを免れず。我が瀬戸内の如き澄瑩秀朗なる風致は、支那には殆ど求めがたきものなるべし。其の山はみな斷層より成り、土瘦せ、石秀づ。これ、西

湖の輭媚を以てすら尚然り。我が邦の如く土壤墳起して細波起伏の狀を爲し、溫粹雅麗なる山容を見ることなし。われ未だ三峽(一)の險を溯り、劍閣(二)の危を蹈まず、未だ流沙(三)の難を經、閩(四)・粤の潮を觀ず。支那の風景を縱談するは、夏蟲の氷を語るに似たるものなきにあらず。たゞ其の過ぐる所に就いて臆斷すれば、實にかくの如し。

(一) 揚子江の上游。
(二) 蜀に入る棧道。
(三) 天山地方。
(四) 福建・廣東。

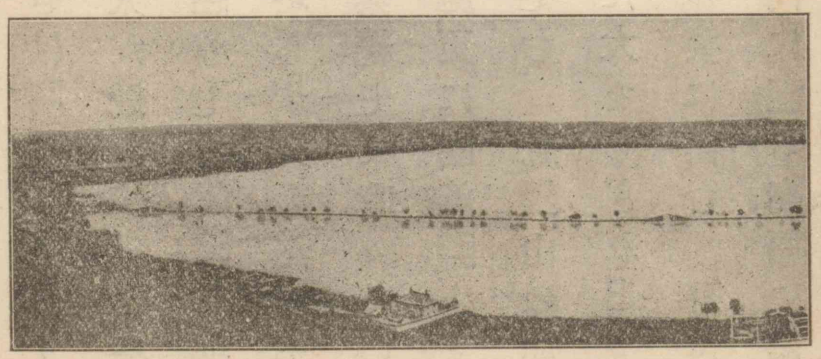


西

要するに、其の長は莽蒼・宏豁・雄健・幽渺に在り、明麗・秀媚・細膩・委曲に在らず。之を譬ふれば、蔗稈を噉むがごとく、漸く佳味に値ふ。我が邦の景の、糖蜜を嘗むるがごとく、齒牙皆甘きがごときにはあらざるなり。

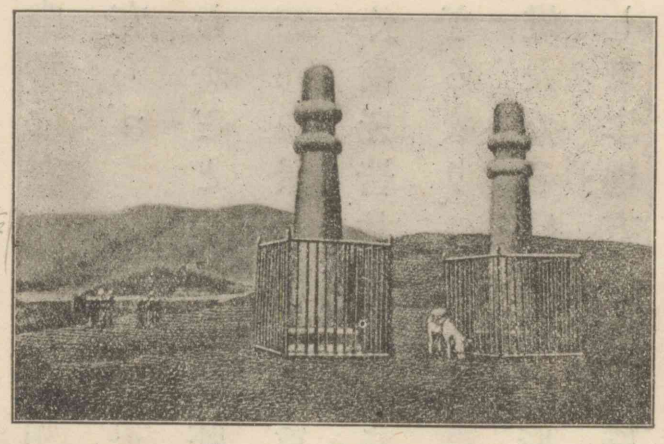
雄大なるは金陵(*)の形勝なり。蓋し京・津地方の如きは莽蒼は之あり、而も其の山太だ遠きが爲に、反

(*) 南京。



潮

つて雄偉の感に乏し。杭州の如きは明麗は之あり、而も其の太だ近きが爲に全く雄偉の趣なし。金陵の地、山太だ遠からず、又太だ近からず、蒼翠縈繞して時々其の角を缺く處、更に幽遠際なき思を生ぜしむ。且鍾山の如きあり、甚だ大ならざれども、而も雄特の姿に富む。野色遠近、高城百里、孝陵廟前より朝陽門に至る高原に馬



孝陵廟

*明の太祖の廟。

を驅れば坐ろに千軍萬馬を馳驅して旌旗野を蔽へる古英雄を想はしむ。吾、同行の士に語つて曰く、「金陵に總督として謀叛氣の起らざる如き人物は、其の人必ず庸愚なり」と。

武昌の形勝は湖廣の沃土を控へ、亦甚だ雄偉なり。然るに其の地、金陵上流の雄鎭として一方を制馭するに宜しくして、以て帝王の州と爲すべからず。黃鶴樓址若しくは龜山の頂に登らん者は轉吾が言の河漢ならざるを知らん。（燕山楚水）

一五 つくば山

春風春水一時來　賀茂真淵

つくば山雪のほらゝ今日ぞけて、
枯生めをゝき春風ぞふく。

湊舟　小澤蘆庵

あこがれて夜半にや出でし、湊舟、
からろの音乃月は聞ゆる。

題しらず　香川景樹

石をのみ玉といだきて歎くかな、
玉は玉ともあらむるゝ世よ。

(一)三三五七―三四二九。
(二)三三八三―三四六一。
(三)三四三〇―三五〇三。

白鷺　千種有功

かつも行き、うはは行むむ白鷺の、
ちらずいかなるもの思ふらん。

示人　橘曙覽

天皇は神にしますぞ、天皇の
敕とおいはゞかしこみまつれ。

一六 もろ矢

兼好法師

ある人、弓射ることを習ふに、もろ矢をたばさみて的に向ふ。師のいはく、「初心の人、二の矢をもつことな

(一)三四五七―三五一四。
(二)三四七二―三五二八。

かれ。後の矢をたのみて、初の矢に、なほざりの心あり。毎度たゞ得失なく、この一矢に定むべしと思へ。」といふ。わづかに二つの矢、師の前にて、一つをおろそかにせんと思はんや。懈怠の心みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ、萬事にわたるべし。」

道を學する人、夕べには朝あらんことを思ひ、朝には夕べあらんことを思ひて、重ねてねんごろに修せんことを期す。いはんや、一刹那のうちにおいて、懈怠の心あることを知らんや。なんぞ只今の一念にお

いて、直ちにすることの甚だ難き。（徒然草）

一七　扇の的

*寿永二年二月。

*さる程に、阿波・讃岐に平家を背いて源氏を待ちける兵ども、あそこの峯、こゝの洞より十四五騎、二十騎うち連れうち連れ馳せきたる程に、判官程なく三百騎になりたまひぬ。「今日は日暮れぬ、勝負を決すべからず。」とて源平互に引退くところに、沖より尋常に飾つたる小船一艘汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、船を横ざまになす。「あれは如

何に。」と見るところに、船の中より年の齢十八九ばかりなる女房の柳の五衣に紅の袴著たるが、皆紅の扇の日出したるを船のせがいに挾みたて、陸へ向つてぞ招きける。

判官、後藤兵衞實基を召して、「あれは如何に。」とのたまへば、「射よとにこそ候らめ。たゞし大將軍の、矢面に進んで御覽ぜられん所を、手だれに狙ひて射おとせとの謀とこそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候らん。」とまをしければ、判官「身方に射つべき仁は誰かある。」と問ひたまへば、「手だれども多

表白裏青。

く候なかに、下野の國の住人那須太郎資高が子に與一宗高こそ小兵にては候へども、手はきいて候。」と申す。判官「證據があるか。」「さん候。かけ鳥などを爭ひて三つに二つは必ず射落し候。」と申しければ、判官「さらば與一呼べ。」とて召されけり。

與一その比はまだ二十ばかりの男なり。かちんに赤地の錦を以ておくび(一)はたそでいろへたる直垂に萌黃縅の鎧著て、足白(二)の太刀を佩き、二十四差いたる切斑の矢負ひ、薄切斑に鷹の羽割合せてはいだりけるぬ(三)ための鏑をぞ差添へたる。滋籐の弓、脇に挾み、

(一) 袖一幅半のうち、袖口の方半幅。
(二) 緒をとぼす金具を銀にてつくれる太刀。
(三) 鹿の角にて作れる鏑。

甲をば脱ぎて高紐にかけ、判官の御前に畏まる。

判官「いかに與一、あの扇の眞中射て敵に見物せさせよかし。」と宣へば、與一「仕つとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、長き身方の御弓矢の疵にて候べし。一定仕らんずる仁におほせつけらるべうもや候らん。」と申しければ、判官大いに怒つて、「今度鎌倉を立つて西國へ向はんずる者どもは、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜん人々は、これより疾く〳〵鎌倉へ歸らるべし。」とぞ宣ひける。

*やどりぎの上に鳩二つ飛べる形。

與一、重ねて辭せば惡しかりなんとや思ひけん、「さ候はゞ外れんをば存じ候はず、御諚にて候へば仕つてこそ見候はめ。」とて御前を罷りたち、黑き馬の太く逞しきに*まろほやすつたる金覆輪の鞍置いて乘つたりけるが、弓取りなほし、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。

身方の兵ども與一が後を遙かに見送つて、「此の若者一定仕らんずると覺え候。」と申しければ、判官も賴もしげにぞ見たまひける。矢比少し遠かりければ、海の中一段ばかりうち入りたりけれども、猶扇のあは

ひは七段ばかりもあらんとこそ見えたりけれ。

比は二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折節北風烈しう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟は搖り上げ、搖り据ゑ、漂へば、扇もくしに定まらず、ひらめきたり。沖には平家船を一面に竝べて見物す。陸には源氏くつばみを竝べてこれを見る。いづれもいづれもはれならずといふことなし。

與一目を塞ぎて、「南無八幡大菩薩、別してはわが國の神明、日光權現・宇都宮・那須湯泉大明神、願はくはあの扇の眞中射させてたばせたまへ。これを射損ずるものならば、弓切折り、自害して人に再び面を向くべからず。今一度本國へ歸さんと思召さば、この矢はづさせたまふな。」と心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹弱りて、扇も射よげにこそなつたりけれ。

與一鏑を取つてつがひ、よつ引いてひようと放つ。小兵といふ條、十二束三つぶせ、弓は強し、鏑は浦響くほどに長鳴りして、過たず扇の要ぎは一寸ばかり置いてひいふつとぞ射切つたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞあがりける。春風に一揉、二揉、揉まれ

て海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日の輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ搖られけるを、沖には平家舷を敲いて感じたり、陸には源氏箙をたたいてとよめきけり。（平家物語）

一八　寺門政次郎に答ふ

藤田東湖

一兩年以來十數度の貴翰、尙又時々御惠投もの に預り、殊に當春梅花の御贈もの等、實以て御厚意淺からず。僕が頑鈍狂愚、何故、右樣御眷顧下され候や、謝する所を知らず、汗顏の至に御座候。

さて愼中は貴答延引も當然に候處、當二月幽厄を脫し候上は、早速一書を裁し、右數度の御厚意を謝し候筈の處、爾來僕が境界、實以て寸暇もこれなく、尤も日々夕刻太白を傾け候暇はこれあり候へども、其の外はとかく閑隙を得ず、今日始めて貴答に及び候。

一、先年、弘道館にて貴兄御面貌はたしかに相覺え候。謂はゆる嶄然頭角、今以て心目に宛然に御座候處、追々御詩文等拜見、尙又御噂承知致候へば、近來益〻御研精の由、憚ながら感心仕候。老

（一）弘化四年より嘉永五年まで水戸に謹愼を命ぜらる。

（二）水戸藩の學校。天保十三年德川齊昭これを開く。

人くさき申分には候へども、御國も學校御開き以來、讀書家は悉く澤山に相成候へども、眞實の學者は寥々に御座候間、國家のため御勵精尤に存候。僕などは罪名載せて幕府の籍にある身分にて、天地の一棄人に候間、理窟がましきことは一切申すまじと心がけ候へども、大義未だ曾て君臣を忘れざる

藤田東湖

至情もだし難く、且は度々の御細書、御深意をも推察致し、旁心事ほゞ吐露仕候。

申すまではこれなく候へども、學問は實學にこれなくては、卻つて無學にも劣り申候。弘道館記中に「忠孝無二、文武不レ歧、學問事業、不レ殊二其效一」と遊ばされ候儀、實に學者立志の模範、志士報國の根本に御座候はんか。今世、親孝行の様なれども、御奉公は出來ぬ風の人も相見え、又御奉公出來候様にても、父子の中とくと致さゞる向も相見え候。これら決して聖人の道にあらずと存

*徳川齊昭の撰且書せるもの。

候。又少々書を讀み候へば、何か仔細らしき顔色を致し、言語等漢文交りにてしやらくさく候へども、劍槍等の藝一切出來申さず、文弱白面の書生と相成候儀、毛唐人ならばそれにて宜しきかも相知らず候へども、かりそめにも神州尙武の域に生れ、且は武家の飯を食ひ候ものは、右樣白面の書生は風上へも置きかね候事勿論に御座候。武人の愚にも困り候へども、どちらと申候へば、寧ろ文弱の書生にはまさり申すべきか。しかし成るべきだけは、文武歧れず兼備これありたき事、これ又勿論に御座候。

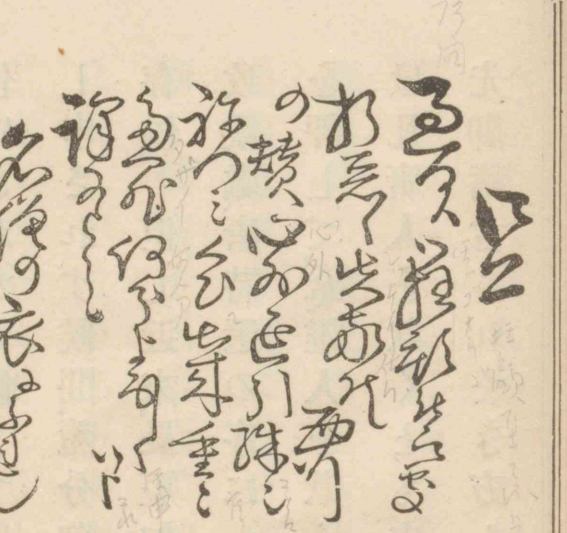
學問・事業その效を殊にせざるに至り候うては、なかく難物なり。僕が輩頑白に相成候へども、今以て學問・事業一致の場合に相成申さず、及ばずながら心を用ひ居る事に候。修己治人の工夫、明倫正名の講究、時々刻々離れ申さず候はば、貴兄などは妙齡の御事ゆゑ必ず學問・事業の一致も御出來なされ候はん。隨分御研精御尤に御座候。

一、讀書は博きを貴び候へども、うはすべりいた

し候うては、何程萬卷を讀み候とても、用をなしかね候はんか。古人の謂はゆる「眼光紙背に透る。」と申す如く讀みたき事に御座候。次第々々に後の世に生まれ候ほど、讀書多く相成申候。古人は六史か七史讀み候へば相濟み候が、十七史又は二十一史と申す様に相成、末が末に相成候はゞ、三十史も五十史も讀み申さず候うては相成らざる譯合故、博きを貴び候中にも、その要を得候儀肝要と存候。人の持前種々これありを得候故、一槩には申兼候へども、歴史等も唯ばつと

(一)史記 前漢書 後漢書 三國志 晉書 宋書 南齊書 梁書 陳書 魏書 北齊書 周書 隋書 南史 北史 唐書 五代史

(二)十七史に宋史 遼史 金史 元史を加ふ。



藤田東湖筆蹟（亡友帖）

讀み候よりは、何か一つ講究著述致す心得にて讀み候方、格別に益を得候様相覺え申候。制度の事も、文辭の事も、名君賢相の行狀其の外一々記憶致すべしと存候うては、大抵の人にては中

中覺えかね申候。東坡(一)が漢書を讀み候法など面白く御座候。尚又御勘考御尤に存候。

一、文章は末藝に候へども、自分にて文を書き候位にこれなく候うては、經書も歷史も本當に解し申されず候間、隨分御餘力には御修行御尤に存候。但し近來、長短句にてごまかし候詩流行致候處、唐詩選の序にも、李太白長語(二)を用ひ候事を評して、「英雄人を欺くのみ。」と申候。今の流行は凡庸人を欺くとも申すべく候。右の類は先先御稽古これなき方と存候。

(一)某讀漢書、至是凡三經手鈔矣。初則一段事鈔三字爲題、次則兩字、今一字。

(二)七言古詩惟子美不失初唐氣格、而縱橫有之太白縱橫、往々彊弩之末閒雜長語、英雄欺人耳。

一、慶元以來、人物林の如く、豪傑も追々に出で候處、其の中にて、仁齋の學問、徂徠の文章、熊澤の經濟、新井の敏捷など、皆畏るべく存候。しかし右の內、徂徠は(一)更に名分を存ぜず、自ら東夷の人と稱し候儀、不屆至極に御座候。新井も才氣絕倫に候へども、東都を張立て候志は惡むべく候。

さ候へば、今に在つては、右數子の長を取り、短を捨て、實學講究致し、孔子の遺意に叶ひ候樣、御同意企望致したき事に御座候。今世の儒者、やゝもすれば唐人の事は丁寧に申し、司馬溫公(二)・朱文

(一)日本國夷人物茂卿拜手稽首敬題。

(二)北宋の司馬光、字は君實、謚して溫公といふ。

(三)南宋の朱熹、字は元晦、謚して文公といふ。

公・韓魏公(北宋の韓琦字は稚圭、魏國公に封ぜらる。)などと稱へ、さて新田義貞が云々、楠木正成が云々など申候類甚だ相濟まず。右樣の人をば、僕は毎々和唐人と唱へ申候、御一笑下さるべく候。その外當世の學風其の弊少からず候へども、迚も書中に盡しかね候故、まづその一端を擧げ候のみに御座候。

僕は最早貴地などへ出て候事は終身これなく候間、拜面もむづかしく候處、貴兄は御墓參御對面等にて御歸鄉も御自由ゆゑ、もし來春など一寸も御歸鄉に相成候はゞ種々存候だけの事は御切磋申すべく候。

先は今日は前文御申譯かたぐ一書を裁し候事に御座候。しかしながら、御覽の通り亂筆さぞ御讀みかねなされ候はんと閣筆致候。以上。

一九　福澤先生を悼むその一

島田三郎

三田の高臺に長嘯して、天下の瞻望を維ぎ、一管の筆を揮ひて泰西の文物を輸入し、三寸の舌を鼓して平民の氣焰を揚げたる當代の巨人福澤先生逝けり。痛悼に勝ふべけんや。

先生は一代の師表にして、明治の社會、先生に負ふ所極めて大なり。曩に先生中風の症に惱み、一時世人を痛憂せしめたれども、其の後輕快に赴き、漸く健康に復するを傳ふ。聞く者皆愁眉を開きて之を祝せざるはなし。吾人以爲く、「先生齡六旬を超えて一旦大患に罹る、其の快談健筆以て社會を鞭撻啓發せる故態に復せんこと難かるべし」と。然れども此の大平民の社會に存するは後進の恃んで心を强くする所なり。即ち其の優游自適一日を永くし、以て吾人の志に酬いんを願ふこと甚だ切なりき。然るに天(一)

(一)天不二愁遺一老一。

(一)明治三十四年二月。

愁に此の老を遺さず、遂に本月三日午後十時を以て白玉樓に徵し去る。(一)嗚呼先生の音容また接すべからず。豈哀惜嘆嗟に勝へんや。

先生の出處經歷、其の主義、其の功績は普く世人の知る所なり。其の社會に對する關係より家庭の生活に至るまで、其の著書と自傳とに昭晰詳悉す。吾人今これを繰返す必要なし。然れども其の梗槩を約述し、吾人の所見を附記するは亦敬慕追念の志を表する所以なり。

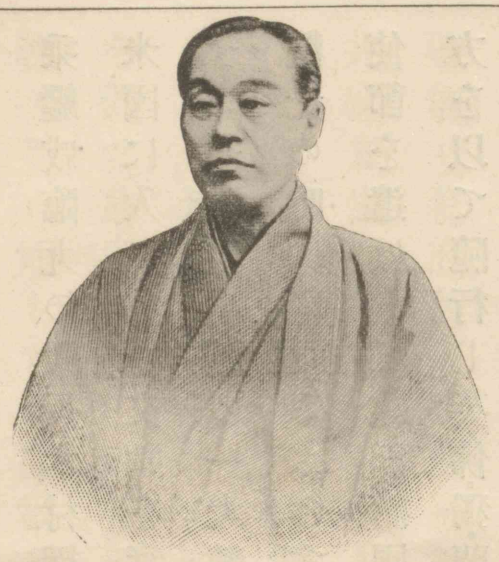
先生の嚴父は中津藩士にして、子女五人あり。先生

(二)名は百助。

は其の季子なり。天保五年十二月二日、大阪の中津藩邸に生る。三歳にして父を喪ひ、母子共に中津に歸る。幼時の教育は尋常の鄉學に漢書を誦習せるに過ぎず。然れども、其の思辨の力は讀書の力に越えて、早く儕輩を凌駕したりといふ。安政元年二月、先生二十一歳、是より先、米使來航し、海内騷然たりしが、泰西兵術の講習を必要とするに至り、先生また砲術研究の志を懷きて長崎に赴けり。是、蘭書讀習の機緣なり。明年大阪に來りて緒(*)方洪庵先生の塾に入る。蓋し其の初め蘭書そのものに意なく、これに

(*)備中足守藩士。蘭法醫。一七〇—一五三。

よりて砲術を解する媒となし、者、其の學漸く進むに至りて純乎たる蘭學研修者となれるなり。中ごろ病のために一旦中津に歸りしが、幾時ならずして再び緒方塾に復り、學益〻進み、塾頭に擧げらる。安政五年、藩の徵に遭ひ、江戸藩邸の蘭學教授となる。當時米人の交際よりして英語の用益〻多し。先生の炯眼早く轉學の必要を覺り、同學諸氏の



福澤諭吉

說に反し、刻苦して英書を研修す。

安政六年十二月、幕府使臣を米國に派す。先生其の乘艦咸臨丸の艦長木村攝津守に乞ひ、從僕となりて米國に入り、其の文物を實見し、明年五月を以て歸朝す。是、先生生涯の一大轉機にして、後來の事業此の觀光の時に得たるもの多し。文久元年十二月、幕府使節を遣はして歐洲諸國を歷訪せしむ。先生飜譯方を以て隨行し、英・佛・獨・蘭・葡・露の諸都を觀て歸り、見聞益〻廣し。我が社會の暗黑の中に世界的光明を透したる西洋事情の一書は、實に此の行の產物なり。

慶應三年軍艦購入の件を以て再び米國に赴く。先生の意見はこれらの旅行毎に轉進し、開國の必要を確信し、幕府舊來の階級制と勤王に伴ふ鎖國論とは共に先生の信仰と背馳して到底相容るゝことあたはざりき。且先生は飜譯官たりしを以て、內外交涉の機事皆其の掌るところの文書によりこれを知るを得て、幕府の敗亡、國勢の變轉、早くも先生の眼底に映ぜり。而して先生は政權の推移を洞看せしのみならず、社會事物の變化を豫知せり。先生がその雙劍を鬻ぎて帶刀の風を棄てたるは、維新の際士人長

刀を插みて殺氣天下に充てる間にあり。

既にして維新の業成り、政府大に人材を登用して、洋學通明の士多く徴用せられ、先生亦其の召命に遭へり。然れども固辭して就かず。其の得る所を以て社會を啓發せんと欲し、茲に自ら天下開導の大任を負ひ、首として慶應義塾を設けて後進を教育し、又著述・飜譯を以て世人を開誘せり。爾來三十四年、藩邸に塾を立てしより四十年、通じて學生一萬餘を養へり。其の人社會各般の階級に出身して一般の進歩を助く。先生又明治十五年を以て時事新報を開刊し、政黨旺盛、政爭劇甚の間に、別に社會教育を主義として一般の知識を開き、又爭議を判するに任ぜり。

二〇 福澤先生を悼むその二

島田三郎

先生は教育家なり、時代思想の鼓吹者なり。幕府の飜譯方となり、三回歐米に航せし外、何の經歴あらず。其の後半の生涯は三田の高臺に逸居して三十餘年を經過す。波瀾なく變化なし。然れども其の言論文章を以て一世を鼓動し、社會を陶冶したる所の偉大なる勢力は、ひとり當世に匹なきのみならず、古今

を通じて有數なる者と評せざるべからず。蓋し嘉永・安政以後、日本が海外の潮流の中に漂ひ、新舊の思想相鬪ふに際し、先生は新思想誘引の先達となり、舊世界の殘壘を破りて一大勝利を博し、確かに先登の月桂冠を戴ける者なり。

故に一科の長所なく、又獨創の先生の學專攻なし。

發明あらず。然れども思想博大、常識明敏、進歩の見解を一切の事物に應用して、之を社會に弘布する能力に至りては、萬人に超絶せり。且其の識見は常に社會に先んぜり。先生幼時儒教の薫陶を受け、其の

長崎に赴くや、砲術を修めんと欲し、端なく蘭書を誦習せり。此の際既に砲術の以て志を成すに足らざるを覺れり。其の江戸に來り横濱に遊びて、英語の招牌を讀む能はざるや、忽ち蘭學を棄てゝ英語を學べり。其の海外に遊んで歸るや、幕府の衰滅免るべからざるを看取し、再び米國に入るや、兵器を購ふかはりに書籍を買うて歸り、戊辰戰亂の間、冷然書を講じて顧みず。王政復古、士皆進仕を榮とするに際し、巷閭に俯して後進を誘掖し、戰餘の殺氣未だ收らざるに、雙刀を脱して市民と稱せり。漢儒が門人を食

客と同視する時代に授業料を收むる學校組織を立て、政事喧擾の間に社會的薫陶に力を致せり。これ皆時流に先だてる見にして、當世にぬきんづる眼を有するにあらざれば能はざるなり。

先生は百代を洞看し、宇宙を解釋する哲學者にあらず、天人冥合、靈魂救濟を志とする宗教家にあらず、詞を修め句を錬る文士にあらず、否卻つて文字のために思想を犧牲にする陋習を打破せんとせる人なり。これを要するに、一代の著述・文章は、崇高宏大、深邃幽玄の思想界に觸るゝにあらずして毎時眼前の程度

より一等を高めんとするにあり。而して見解分明、信仰確實、平易大膽の文を以てこれを宣傳す。其の多數を動かして偉大なる效果を收め、優に社會改造の目的を達せしはこれがためなり。先生の筆述、前後五十部百五冊、收めて其の全集にあり。此の他、時事新報に載する者を合せば更に多からん。佛人(一)テイヌ、曾て英國文界の偉人(二)ジョンソンの全集を研究して謂つて曰く、「其の十九世紀に於て新に學ぶべき奇思妙想を發見せずと雖も、其の十八世紀の必要に應じて社會を裨益せし者多し。」と。ジョンソンの勢

(一) 佛國の歴史家。一八二八—一九三一。
(二) 英國の文學者。一七九〇—一七八四。

力が當時に盛なりし所以、其の著述が一世に功ありし所以、こゝに在り。後の讀者其の奇思妙想を發見せざるを以て其の功を小とするを得ず。先生の文界に於ける位置、蓋しこれに近し。

先生の勢力を以て單に其の文章・識力に歸するは、能く先生を知る者にあらず。先生は確信・實行を大膽明快に筆に載す。これ世を動かす所以にあらずや。其の獨立自尊を說くや、口舌・文章に於てするのみならず、これを其の躬行に於てし、其の歐米の文明を鼓吹するや、これを事物に應用し、其の自由平等を宣傳するや、階級隸屬の生活を破るに汲々とし、其の官尊民卑の弊を論ずるや、自身軒冕を泥塗にする慨あり、其の家庭の尊貴を說示するや、先生まづ其の實例を置かんと努めたり。是れ豈確信なき者の得て企つる所ならんや。

先生を以て拜金宗の大和尙となし、節義を輕んずる者と爲すは、尤も先生と其の時代とを曉らざる者なり。蓋し先生が歐米の文物を輸入せんとするや、其の反面に於て鎖國の舊夢を一掃するに努めざるべからず。自主獨立の主義を宣べんとせば、其の反面

に於て隷屬服從の慣習を打たざるべからず。平民自活の生業を教へんとせば、武士世祿の依賴心を棄てしめざるべからず。此の過渡の時機に會し、武士の理想的人物を罵倒して以て一世を警醒せし者卽ち有名なる楠公論にあらずや。是、楠公其の人を擊つにあらずして武士の舊想を擊ちたる者、恰も一休の俗僧を破せんが爲に釋迦を罵りたる意に髣髴たり。其の金錢を貴ぶの說法は「武士は食はねど高楊枝。」の氣習を破したる者に過ぎず。先生これがためには世の怒嘲を冒して戰へり。吾人卻つて先生の

一休の狂歌に「釋迦といふいたづらものが世に出でて多くの人をまよはするかな。」

勇悍を稱せざる能はず。

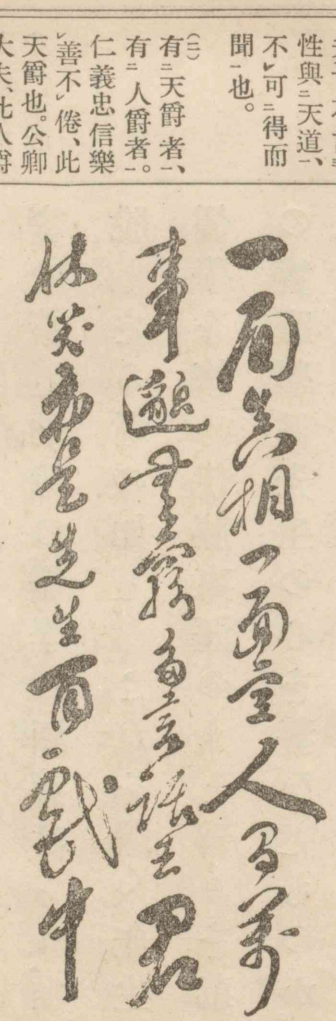
先生の明治社會に於ける位置は頗るボルテールが十八世紀の佛國に於けるものに似たり。先生が歐米の文物思想を總槩して輸入せんとし、博大通達の材を以て盛に飜譯・著述に從事せし所、恰もボルテールが英國に博採せしに似たり。甲が儒教を說破せし所、恰も乙が羅馬加特力を破壞せんとせし者に類す。而して其の辯銳利、共に能く破壞の目的を達したれども、其の言奇矯、後進をして誤解せしめ、一は遂に拜金宗といふ一派の信仰を形成し、他は遂に宗教

佛國の文學者。一六九四―一七七八。

(一)周の大儒。性惡說を唱ふ。
(二)楚の人、荀に學ぶ。秦の始皇及び二世皇帝に仕ふ。
(三)季路問レ事ニ鬼神一。子曰未レ能レ事レ人、焉能事レ鬼。敢問レ死。曰未レ知レ生焉能知死。

其の者を擊破せしが如き看を呈するに至れり。三田の末流に拜金の臭味あるは、荀卿の說によりて李斯の徒を出したるに類す。吾人は先生を以て此の宗派の大和尚と認むる能はざるなり。

先生は儒教を痛擊し、自活生業を稱道せしが、先生の行は卻つて儒教の旨に協へり。是、一見奇なるが如くなれども決して奇ならざるなり。先生は形而上の考案に多くの思を凝らさず、專ら實踐躬行を貴べり。是生を知らずして焉ぞ死を知らん。」との旨に合するにあらずや。先生の歐米の文物を輸入する、專ら制度・商業・工藝・科學の實物的傾向を有し、哲理・宗教の研究工夫を要せず。是、性と天道とを語らざる者に類するにあらずや。其の一方に武士的生活を打擊するに拘らず、去就を嚴明にして處士自ら高うせる迹は、儒教の進退節義を言ふ者に類す。其の自尊といふ教訓を以て天爵を全くせんとするは、孟軻の「人々己に貴きものあり。」といふに合し、其の軒冕



福澤諭吉筆蹟

(一)子貢曰夫子之文章可ニ得而聞一也。夫子之言ニ性與ニ天道一、不レ可ニ得而聞一也。
(二)有ニ天爵者一、有ニ人爵者一。仁義忠信樂レ善不レ倦、此天爵也。公卿大夫、此人爵也。
(三)欲レ貴者人之同心也、人々有下貴ニ於己一者上、弗レ思耳。

を泥塗にして王公に屈下せざる所は、大人を藐視し、晉楚の富と爵とに對するに德と齒とを以てしたるに似たり。先生は知識を歐米に博採せしが、其の行實は蓋し幼時の儒學に涵養せられ、唯俗儒の範圍を脫したる者の如し。これを聞く、「先生の嚴父百助君儒學を修め、伊藤東涯の人と爲りを慕へり。」と。堀川の實踐學派、先生の心を養ひしものか。而して先生少時尤も春秋左氏傳を愛讀せりといへば、節義に嚴なる所、由來なしと言ふべからず。

先生晩年著す所頗る壯年の思想に異なり。福翁百

晉楚之富不可及也。
彼以其爵、我以吾仁。
彼以其富、我以吾義。

話中往々形而上の問題に涉るものあり。然れども科學的研究の結果にあらず。先生は結局常識の人なり、實踐の人なり。博大なる思想家にして精深なる考究家にあらず、大膽なる論辯家にして懷疑の批評家にあらず。唯其の四十年間一貫の行徑を辿りて世の風濤に蕩搖せられず、誠實に社會を薰陶し、諄諄として倦まず、言行一致、平易の言を立てゝ人々行ふを得る道を宣べ、自ら善くし、兼ねて人を善くせる其の大功誰か先生に比すべき者あらん。眞に常識の巨人、平民の典刑なり。獨立自尊の四字は先生の

躬行によつて社會に現示せられたり。先生の書は以て先生を評するに足らずして、唯其の行實を研究して始めて能く其の教育を解得すべし。今や此の巨人を失へり。明治社會の損失これより大いなるはなし。吾人、公に於ては平民の典刑を奪はれたるを惜み、私に於ては敬慕せる巨人を失へるを悲しむ。

（福澤先生哀悼錄）

師範學校 **國文教科書** 本科用卷四終

文部省檢定濟
大正五年一月十二日　師範學校國語科教科書

明治三十六年十二月五日印刷
明治三十七年二月廿六日發行
明治三十六年十二月八日訂正再版印刷
明治三十七年二月廿九日訂正再版發行
明治四十二年三月廿八日訂正十三版印刷
明治四十二年三月三日訂正十三版發行
大正五年一月七日修正十六版印刷
大正五年一月十日修正十六版發行

明治四十四年十二月十三日訂正十五版印刷
明治四十四年十二月十六日訂正十四版發行
明治四十五年二月九日訂正十四版印刷
大正四年十月廿七日修正十五版發行
大正四年十月三十日修正十五版發行

定價
卷一、二各金三拾八錢
卷五金三拾五錢
卷三、四、六各金二拾八錢

著作權所有

編者　東京市小石川區高田老松町五十二番地　吉田彌平
發行者　東京市神田區裏神保町六番地　上原才一郎
發行所　東京市神田區裏神保町六番地　光風館書店（電話本局二千三十九番 振替口座東京三二七番）
印刷者　東京市神田區裏神保町六番地　四海民藏

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附可致候

師範學校國文教科書 本科用 全六冊

東京市英蓮舍第一工場印刷